

令和 4 年 9 月 2 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02376

研究課題名（和文）第一次世界大戦と民間人 「武器を持たない兵士」の出現と戦後社会への影響

研究課題名（英文）The First World War and Civilians. Emergence of Soldiers without weapons and impact on the Postwar Society

研究代表者

鍋谷 郁太郎（Nabetani, Ikutaro）

東海大学・文学部・教授

研究者番号：10266356

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,100,000円

研究成果の概要（和文）：史上初めての総力戦になった第一次世界大戦において、「前線」と「国内」の境界線が解けていった。つまり、戦いの場が以前の戦争と違い、限りなく「国内」に入って来た。総力戦においては、兵士以外の民間人も何らかの形で戦争に積極的に関与させられ、「武器を持たない兵士」になったからである。その中で民間人の殺戮も日常になっていく。本共同研究では、第一次世界大戦における主要参戦国を取り上げて、総力戦の中で民間人が何を考えて如何なる行動をとって行ったのかを明らかにすると同時に、戦後ヨーロッパ社会への影響を考えていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

共同研究の対象国として、ドイツ、イタリア、ロシア、ハンガリー、フランス、そして日本を取り上げた。これらの主要参戦国において「武器を持たない兵士」となった民間人が、4年に亘る長期消耗戦を戦い抜いた心理的背景や物的背景にあったものを明らかにしていった。同時に、総力戦を経験した民間人が、戦後の社会の変貌—「暴力化」と「民主化」—に如何に関わっていったのかを解明していった。その成果は、鍋谷郁太郎（編）『第一次世界大戦と民間人』（錦正社、2022年3月）の形で出版された。

研究成果の概要（英文）：In World War I, the first all-out war in history, the boundary between "front lines" and "domestic" was dissolved. In other words, the battlefield became infinitely more "domestic" than in previous wars. In the war of total war, civilians other than soldiers were actively involved in the war in one way or another, and they became "soldiers without arms. In this context, the killing of civilians also became a daily occurrence. In this joint research, we took up the major countries that participated in World War I and clarified what civilians thought and did in the midst of total war, and at the same time, we considered the impact on postwar European societ

研究分野：ドイツ現代史

キーワード：第一次世界大戦 民間人 武器を持たない兵士 戦後社会 ドイツ イタリア ロシア ハンガリー

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦の世界史的意義は、「総力戦」体制を史上初めて参戦主要国の中に作りあげたことであった。「総力戦」体制は、政治統治システム、経済システム、国民意識を大きく転換させて、20世紀型の民主主義福祉国家を生み出す原動力となる。確かに、第二次世界大戦の方が参戦国数や動員兵士数あるいは戦死者数においては遥かに上回っているが、「総力戦」体制を生み出し、「近代」から「現代」への転換点となった点において、第一次世界大戦の世界史的意味は極めて大きい。本研究は、第一次世界大戦期の「総力戦」体制における民間人という問題圏を、東西ヨーロッパを中心に、日本も視野に入れ、研究していくものである。具体的には、本研究は、1. 「総力戦」体制下における占領地民間人及び少数民族民間人、2. 「前線」と「銃後」社会の境界の溶解、3. 戦後社会の「暴力化」における民間人の戦争体験の意味、といった問題圏を明らかにする。

第一次世界大戦は人類が初めて経験する長期消耗戦となり、参戦ヨーロッパ諸国は「総力戦」体制を確立していった。「総力戦」とは、前線とその背後の地域の境界を曖昧なものとし、国内の民間人が国内戦線＝銃後に組み込まれていくことを意味していた。戦争に勝つには、もはや前線兵士の力だけではなく、工場動員・農村動員・炭鉱動員あるいは従軍看護婦や慰安婦といった形で民間人を戦争体制にどれだけ組み込めるかが大きな意味を持つようになっていった。つまり、第一次世界大戦は、史上初めて「武器を持たない兵士」としての民間人を大量に生み出し、各国の軍部や政府は、民間人に前線兵士と同様の重要性を見出していったのである。

「武器を持たない兵士」としての民間人の重要性を軍部や政府が見出していくということは、国内的には民間人の各種分野への動員のやり方、民間人の生活保障、少数民族やユダヤ人の扱い方、女性・老人・未成年・障害者への対処といった問題がクローズアップされてくることを意味した。また、対外的には、民間人の重要性は、無差別爆撃や占領地域での民間人の大量殺戮、強制移送や強制労働という形で現れ、深刻な人道的な問題をも生み出していった。特にドイツがフランスやベルギーの占領地で、あるいはオーストリアと共に東ヨーロッパの占領地域で行なった民間人への上記の行為は、戦後に戦争犯罪と認定されることとなる。同時に、外国人労働者や植民地人などの「国民」ではない存在を強制動員や強制徴用などで国家体制に組み込むことは、国家統治システムの高度化につながり、第一次世界大戦後から現代にもその意義が継続していく。

第一次世界大戦研究は、ヨーロッパ各国で1970年代までは外交史・政治史中心で展開されてきたが、1980年代ごろから社会史の影響のもとでパラダイム転換が起こり、日常史や心性史といった視点からのアプローチが行なわれるようになった。その結果として、自国内の民間人と戦争の関係や民間人の戦争生活あるいは経済動員のあり方の諸相が、ケーススタディを通じて各国で次第に明らかになってきている。しかし、対外的な問題の次元、つまり敵国民間人地域への無差別攻撃や、占領地区・侵攻地域で敵国及び中立国の民間人に対する大量殺戮、強制労働、強制移送、強制移住の実態の研究は、2000年代に入ってようやく始まった。とりわけ、東部戦線におけるその事態は、西部戦線と比べて未開拓の分野が多い。2014年に大戦開戦100年を迎え、日本でもさまざまな研究が公表され始めているが、それにもかかわらず未開拓の分野が広がっている。

申請者は、第一次世界大戦前ドイツにおけるバイエルン地方の社会主義運動の実態を、ドイツ国民国家における凝集力の次元で考えてきた。しかし、国民国家の完成度の実態分析に次第に関心が移行してきて、その中で人類初の総力戦となった第一次世界大戦を国民国家の質的転換という視点で考えるようになった。その成果は、「戦時社会主義と「初期現代文明」ドイツの出現 第一次世界大戦と近代の終焉」『史学雑誌』120-3(2011年3月)、「ポスト冷戦期ドイツにおける第一次世界大戦研究と歴史家たち」『近現代史研究会会報』80(2013年11月)、「ポスト冷戦期ドイツにおける第一次世界大戦史研究」『軍事史学』50-3/4(2015年3月)、「76年目の開戦の記憶—第一次世界大戦とオーラルヒストリーの試み」(『東海史学』51号(2017年3月)掲載予定)という形で世に問うた。また、コロンビア大学の世界的ドイツ現代史家であるフォルカー・ベルクハーンの『第一次世界大戦 1914-1918』(東海大学出版部、2014年)の訳書を出版した。

申

2．研究の目的

申請者は、19世紀的夜警国家的国民国家を転換させ、20世紀的干渉国家的国民国家を作りだした「総力戦」の実態を、兵士だけでなく「武器を持たない兵士」＝民間人のレベルで考えていく必要性を強く感じている。何故なら、戦争を経験した圧倒的多数は民間人だったからである。そこで、この研究は、第二次世界大戦に比していまだ明らかになっていない領域の多い第一次世界大戦における民間人という領域を扱うことで、「近代」から「現代」への転換点とされる第一次世界大戦の世界史的意味をより多角的に探っていくものである

3．研究の方法

本研究は、第一次世界大戦という総力戦体制における民間人の諸相を個別実証的と同時に比較方法論で明らかにしていくものである。まず、研究組織は、ドイツ、フランス、イタリア、オーストリア＝ハンガリー、ロシアの研究者から構成される共同研究体制を組織化する。研究対象を軸に、第1グループ「総力戦」体制下における占領地民間人及び少数民族民間人、第2グループ「前線」と「銃後」社会の境界の溶解、第3グループ「戦後社会の暴力化」における民間人の戦争体験の意味」という三つのグループに分ける。その上で、欧米の歴史学会でこの問題を個別に展開してきた研究者と連帯体制を構築する。そして、成果を内外で公開する。それによって、総力戦体制の中の民間人を巡る総合的な論議を日本や欧米の歴史学会に喚起する。

4．研究成果

共同研究の対象国として、ドイツ、イタリア、ロシア、ハンガリー、フランス、そして日本を取り上げた。これらの主要参戦国において「武器を持たない兵士」となった民間人が、4年に亘る長期消耗戦を戦い抜いた心理的背景や物的背景にあったものを明らかにしていった。同時に、総力戦を経験した民間人が、戦後の社会の変貌－「暴力化」と「民主化」－に如何に関わっていったのかを解明していった。その成果は、鍋谷郁太郎(編)『第一次世界大戦と民間人』(錦正社、2022年3月)の形で出版された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計31件（うち査読付論文 18件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 鍋谷 郁太郎	4. 巻 54
2. 論文標題 ベルリン警察文書に見える第一次世界大戦－1914年8月～1915年7月－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海史学	6. 最初と最後の頁 35-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kawate Keiiti	4. 巻 5
2. 論文標題 Japanese self-image in oppsition to the idea of Modern Europe and the rise of nationalism in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Intercultural Studies / Kulturoznawcze Czasopismo Naukowe)	6. 最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ikeda Yoshiro	4. 巻
2. 論文標題 .	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 .	6. 最初と最後の頁 354-370
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 剣持久木	4. 巻 227
2. 論文標題 フランス人と第一次世界大戦	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Equipe de Cinema	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 393
2. 論文標題 フランスにとっての第一次世界大戦	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 友 Iwamami Hall	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 263
2. 論文標題 書評 橋本伸也編『紛争化させられる過去ーアジアとヨーロッパにおける歴史の政治化ー』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 118-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 54
2. 論文標題 公共史のすすめー書物・映像・博物館を巡ってー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海史学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒沢文貴	4. 巻 55-3
2. 論文標題 生命体としての軍隊	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 70-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒沢文貴	4. 巻 860
2. 論文標題 書評 大江洋代『明治期日本の陸軍』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 179-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒沢文貴	4. 巻 992
2. 論文標題 書評 酒井一臣『帝国日本の外交と民主主義』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 55
2. 論文標題 第一次世界大戦の空襲が生んだドイツの「銃後 (Heimatfront)」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 軍事史学	6. 最初と最後の頁 67-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 899
2. 論文標題 開戦八〇年とドイツ パブリックヒストリー研究の視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 64-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 829
2. 論文標題 新書から広がる歴史学：石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鍋谷郁太郎	4. 巻 127-5
2. 論文標題 2017年の歴史学界：回顧と展望 ヨーロッパ・現代一般	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 269-372
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鍋谷郁太郎	4. 巻 824
2. 論文標題 書評 伊藤定良著『近代ドイツの歴史とナショナリズム・マイノリティ』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 98-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 33
2. 論文標題 フランスにおける公共史の実践 - ブロワ歴史集会に参加して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日仏歴史学会会報	6. 最初と最後の頁 40-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 姉川雄大	4. 巻 127-5
2. 論文標題 2017年の歴史学界：回顧と展望 ヨーロッパ・現代（ロシア・東欧・北欧）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 387-393
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝田由美	4. 巻 127-5
2. 論文標題 2017年の歴史学界：回顧と展望 ヨーロッパ・近代（南欧）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 365-369
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 98
2. 論文標題 ナチ期ドイツの民間防空 - 個人の守りから民族共同体の防衛実践へ -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近現代史研究会・会報	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田嘉郎	4. 巻 102
2. 論文標題 ロシア革命とはなんだったのか。百年目に考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 32-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田嘉郎	4. 巻 918
2. 論文標題 座談会 ロシア革命の百年を問い直すー民主主義・戦争・権力	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 198-207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田嘉郎	4. 巻 3385
2. 論文標題 書評 和田春樹『ロシア革命』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田嘉郎	4. 巻 102
2. 論文標題 書評 . « ; » ; « ; » ; . - 1917	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 131-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鍋谷郁太郎	4. 巻 96
2. 論文標題 第一次世界大戦と「戦争文化(Kriegskultur/culture de guerre)」論の射程	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 桜文論叢	6. 最初と最後の頁 173-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 126-5
2. 論文標題 2016年の歴史学界－回顧と展望－現代ヨーロッパ 一般	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 351-353
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 剣持久木	4. 巻 63
2. 論文標題 書評 宮下雄一郎『フランス再興と国際秩序の構想：第二次世界大戦期の政治と外交』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川手敬一	4. 巻 63
2. 論文標題 書評：ペーター・ガイス/ギヨーム・ル・カントレック監修、福井憲彦/近藤孝弘監訳『ドイツ・フランス 共通教科書 【近現代史】ウィーン会議から1945年までのヨーロッパと世界』（明石書店、2016年）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 37-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 71
2. 論文標題 ヴァイマル期ドイツの民間防空と「平和」の敗北 「守り」と「平和」の批判的検討に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 史論	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳原伸洋	4. 巻 1
2. 論文標題 企画の趣旨 そしてそれをさらに『超える』ために	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒沢文貴	4. 巻 834
2. 論文標題 書評 小林和幸編『近現代日本 選択の瞬間』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 106-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 IKEDA Yoshiro	4. 巻 9-5/1
2. 論文標題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 -	6. 最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 ドイツ・ミュンヘンでヨーロッパ近現代史を研究する意味 在外研究の成果と教育上の効果
3. 学会等名 読史会（東京女子大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 空襲の記憶文化 日本とドイツ、「想起」と「忘却」の比較を通じて
3. 学会等名 ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会（東北学院大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 Kommentare zur Geschichte vom zivilen Luftschutz in Deutschland und Japan Über die Ähnlichkeiten und Unterschiede, On the Transnational Destruction of Cities
3. 学会等名 アウグスブルク大学歴史学部
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 剣持久木
2. 発表標題 権力者と集合的記憶 - フランス史からのコメント -
3. 学会等名 歴史学会第43回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 剣持久木
2. 発表標題 公共史のすすめ
3. 学会等名 現代史研究会シンポジウム：公共史/パブリックヒストリーと現代史 - 『越境する歴史認識』をめぐる - （招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 姉川雄大
2. 発表標題 現代ヨーロッパの右翼ポピュリズム：ハンガリーの事例から
3. 学会等名 大東文化大学国際比較政治研究所2018シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 黒沢文貴
2. 発表標題 日本軍におけるルールと作法－捕虜問題を中心に－
3. 学会等名 慶應義塾大学教養研究センター主催「日吉キャンパス公開講座」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 第一次世界大戦と空襲 「新しい軍事史」を踏まえて
3. 学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 手の平からこぼれ落ちていく「平和」をすくうために 竹本真希子『ドイツの平和主義と平和運動』から、「平和」の歴史研究の意義を考える
3. 学会等名 西洋近現代史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田嘉郎
2. 発表標題 テクニカラーのソ連－生活様式としてのハイ・スターリズム
3. 学会等名 第68回日本西洋史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田嘉郎
2. 発表標題 Russia in 1917: Legacies of the Centennial, Unanswered Questions, New Agendas (Roundtable)
3. 学会等名 ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention (Boston, USA)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 剣持久木
2. 発表標題 反戦平和運動の挫折から仏独歴史和解へ：歴史認識問題解決のヒントを求めて
3. 学会等名 第17回日韓歴史家会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 両大戦間期ドイツの民間防空における「平和」の敗北 - 「守り」のイデオロギーとの相克 -
3. 学会等名 日本平和学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柳原伸洋
2. 発表標題 「終わらない」空襲の世紀を考える ドイツと日本を中心に
3. 学会等名 デモクラシー研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒沢文貴
2. 発表標題 天皇制度の現在・過去・未来－支配の正統性をめぐって－
3. 学会等名 静岡県立大学広域ヨーロッパ研究センター主催シンポジウム「君主制の現在・過去・未来－生前退位を日欧比較の視点で考える－」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ikeda Yoshiro
2. 発表標題 The Provisional Government and the East Within and Outside Russia
3. 学会等名 The Asian Arc of the Russian Revolution: Setting the East Ablaze?
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Anwgawa Yudai
2. 発表標題 History, "Christian Nationalism," and Neoliberal Politics in Contemporary Hungary
3. 学会等名 25th international Conference of Europeanists
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 黒沢文貴	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 274
3. 書名 歴史に向きあう	

1. 著者名 剣持久木（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 204
3. 書名 『よくわかるフランス近現代史』	

1. 著者名 姉川雄大	4. 発行年 2018年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 504
3. 書名 堀越孝一編『悪の歴史 西洋編（下）』 担当「コシュート・ラヨシュ 改革と革命の指導者」、336-348頁	

1. 著者名 姉川雄大	4. 発行年 2018年
2. 出版社 一色出版	5. 総ページ数 653
3. 書名 石井昌幸・坂上康博・高嶋航・中房敏朗編『スポーツの世界史』 担当：第6章「ハンガリー 市民社会における暴力とスポーツ」、193-211頁	

1. 著者名 黒沢文貴	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 479
3. 書名 『丸山眞男集 別集』第四巻（正統と異端1）	

1. 著者名 剣持久木（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 213
3. 書名 越境する歴史認識：ヨーロッパにおける「公共史の試み」	

1. 著者名 黒沢文貴（共編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 343
3. 書名 日記で読む近現代日本政治史	

1. 著者名 池田嘉郎（編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 316
3. 書名 世界戦争から革命へ（ロシア革命とソ連の世紀1）	

1. 著者名 土肥 秀行、山手 昌樹（編著）、勝田由美（共著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 348(57-71, 101-112)
3. 書名 教養のイタリア近現代史	

1. 著者名 高橋進・村上義和（編著）、勝田由美（共著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 366 (205-210, 311-312)
3. 書名 イタリアの歴史を知るための50章（「社会主義運動の台頭 アナーキズムから改良主義へ」、「イタリアの女性に妊娠中絶の権利はあるか」担当）	

1. 著者名 橋本伸也（編）、姉川雄大（共著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 303 (93-102, 195-216)
3. 書名 せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題 ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤	

1. 著者名 堀越公一（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 503(330-340)
3. 書名 悪の歴史 西洋編（下）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	黒沢 文貴 (Kurosawa Fumitaka) (00277097)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	姉川 雄大 (Anegawa Yudai) (00554304)	千葉大学・アカデミック・リンク・センター・特任講師 (12501)	
研究分担者	柳原 伸洋 (Yanagihara Nobuhiro) (00631847)	東京女子大学・現代教養学部・准教授 (32652)	
研究分担者	川手 圭一 (Kawate Keiiti) (50272620)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
研究分担者	剣持 久木 (Kenmoti Hisaki) (60288503)	静岡県立大学・国際関係学部・教授 (23803)	
研究分担者	勝田 由美 (Katsuta Yumi) (80286666)	工学院大学・教育推進機構(公私立大学の部局等)・教授 (32613)	
研究分担者	池田 嘉郎 (Ikeda Yoshiro) (80449420)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------